◎猪熊弦一郎の「瀬戸内国際芸術祭 2016」参加について

このたび、画家、猪熊弦一郎（1902–93）が「瀬戸内国際芸術祭 2016」の参加作家（広域・回遊）の一人に選出され、**「香川県庁舎一階壁画《和敬清寂》」**と**「丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（MIMOCA)」**が出品作品となりました。

香川県出身の猪熊は、様々な活動において故郷の文化振興に寄与してきました。現在「アート県」と称する同県の、礎の一人と言えるでしょう。今回の 2 点の出品作品は、そうした活動を代表するものです。

香川県庁舎一階壁画《和敬清寂》

香川県庁舎旧本館（現東館、1958 年竣工）は、建築家、丹下健三の代表作の一つです。猪熊はその誕生に大きく関わりました。新しい時代の県庁舎をどう作るか悩んでいた当時の知事、金子正則に、旧制丸亀中学校の先輩だった猪熊が「よい設計を」と助言し、若く優秀な建築家として丹下を紹介したのです。

香川県県庁舎一階ロビーは、金子のめざした「開かれた空間」の具現化としてデザインされており、丹下はその中心、センター・コアの四面の壁に、猪熊の壁画を設置しました。不規則な幾何学形を用いた抽象的なイメージは、白、赤、黒、青、四色の陶板パネルを組み合わせて作られており、それぞれの面のタイトルに《和敬清寂》の文字が一つずつ当てられています。

当時、猪熊はニューヨーク在住で、現場を見ることなく原画を完成させました。しかし、シンプルで大胆ながら、どこか温かみのあるその意匠は、ゆったりとした空間に驚くほどぴたりと当てはまっており、今なお、親しみ深い場を創出しています。

香川県庁舎一階壁画《和敬清寂》　　撮影：高橋章

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（MIMOCA）

丸亀市の市制 90 周年記念事業の一つとして、猪熊の全面的な協力のもと、1991 年 11 月に開館しました。猪熊は「よい美術館を」と希望し、新しい時代を反映した「現代美術」を積極的に紹介すること、便利な駅前立地とすること、美しい空間（建築）にすること、子どもの教育に力を入れることなどを市に説き、人々が日々の疲れを癒す「心の病院」となるような美術館をめざしました。開館当時、インタビューで次のように語っています。

> ***日本に美の分かる人をもっと増やしていきたい。美の分かる人こそ平和を求める人だと思います。*** （『三彩』1992 年 1 月号、p.97）

今年開館 25 周年を迎えるこの美術館には、二万点を超える猪熊作品が収蔵されているだけではなく、活動理念においても、一貫して「美」を探究しつづけた猪熊の画業が反映されています。その点において、彼の集大成的な作品の一つと位置づけることが出来るでしょう。

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館外観　　撮影：山本糾

作家プロフィール

猪熊弦一郎／Genichiro Inokuma

1902　香川県高松市生まれ。少年時代を香川県で過ごす。
1921　旧制丸亀中学校（現 香川県立丸亀高等学校）を卒業。
1922　東京美術学校（現 東京藝術大学）西洋画科に進学。藤島武二教室で学ぶ。
1926　帝国美術院第 7 回美術展覧会に初入選。以後、第 10 回、第 14 回で特選となるなど、1934 年まで主に帝展を舞台に活躍する。
1936　志を同じくする伊勢正義、内田巖、小磯良平、佐藤敬、三田康、中西利雄、脇田和、鈴木誠と新制作派協会（現 新制作協会）を結成。以後、発表の舞台とする。
1938　フランスに遊学（1940 年まで）。アンリ・マティスに学ぶ。藤田嗣治と知り合い、交流を深める。
1950　**三越包装紙「華ひらく」をデザインする。**
慶應義塾大学壁画《デモクラシー》及び名古屋丸栄ホテル壁画《愛の誕生》に対し第二回毎日美術賞を贈られる。
1951　国鉄上野駅中央ホールの大壁画《自由》を制作。
1955　再度パリでの勉学を目指し日本を発つが、途中滞在したニューヨークに惹かれそのまま留まることとし、約 20 年間同地で制作する。渡米をきっかけに抽象画を描くようになる。
1958　**香川県庁舎一階ロビー壁画《和敬清寂》を制作する。**
1973　日本に一時帰国中、病に倒れる。
1975　ニューヨークのアトリエを引き払う。その後、冬の間をハワイで、その他の季節は東京で制作するようになる。
1989　丸亀市へ作品 1000 点を寄贈。
1991　**11 月 23 日、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（MIMOCA）が開館する。**
1992　所有するすべての作品などを丸亀市に寄贈する趣旨の文書提出。
以降、順次丸亀市猪熊弦一郎現代美術館に搬入。
1993　東京にて逝去。90 歳。

猪熊弦一郎　　撮影：高橋章